

寺町旧域(妙満寺跡)発掘調査現地説明会資料

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所

2016年2月27日

所在地：京都市中京区押小路通河原町西入榎木町

調査期間：2015年9月7日～2017年3月31日(予定)

はじめに

この調査は、京都市新庁舎整備に伴う埋蔵文化財発掘調査です。調査面積は全体で5,073㎡あり、1～5区に分割して調査する予定です。今回、説明会の対象となるのは1区にあたり、調査面積は約565㎡です。

調査地は、豊臣秀吉が築いた御土居の内側、寺町通の東側に沿って設けられた寺院街区にあたり、南に本能寺、北に要法寺(現在、東山三条)が接していました。また、平安京の東京極大路東側に面する場所でもあります。今回の調査目的は、妙満寺が天正11年(1583)に四条堀川から当地に移転してきてから、昭和43年に岩倉へ再移転するまでの約400年間の変遷を明らかにすることにあります。

これまでの調査成果

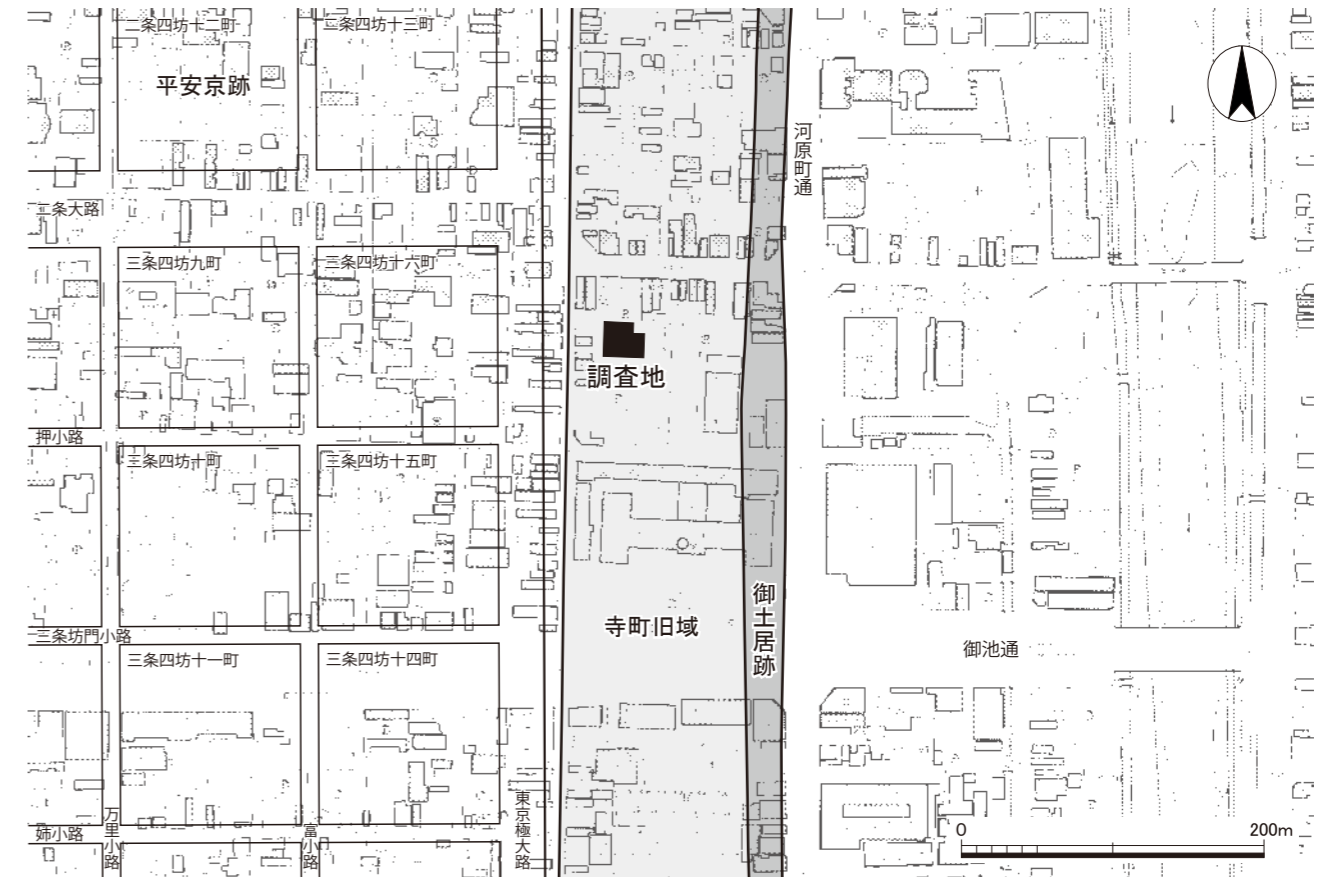
昨年末までに2区の調査を終えています。この調査では主に江戸時代末から明治時代の放生池、方丈建物の基壇地業などを確認しました。また、寺町形成期の整地とそれ以前の耕作地の痕跡も確認できました。出土遺物は土師器・輸入陶磁器・瓦などがあります。

今回の調査成果

調査区ほぼ全域で、江戸時代から明治にかけての妙満寺の本堂跡を確認しました。本堂跡は東西4間(約16m)、南北3間(約10m)以上を検出し、柱間は約4m(13尺)でした。建物北辺中央には一辺1.5m程度の隅丸方形の柱穴が4基あり、須弥壇を形成していたと考えられます。また、須弥壇のある区画が内陣、その両脇が脇陣、南側は外陣にあたりと考えられます。さらに建物北辺中央には東西約5m分の後拝、建物外周には縁(6尺幅)がめぐり、さらにその外周には基壇化粧石が埋め込まれていた痕跡を確認しました。

まとめ

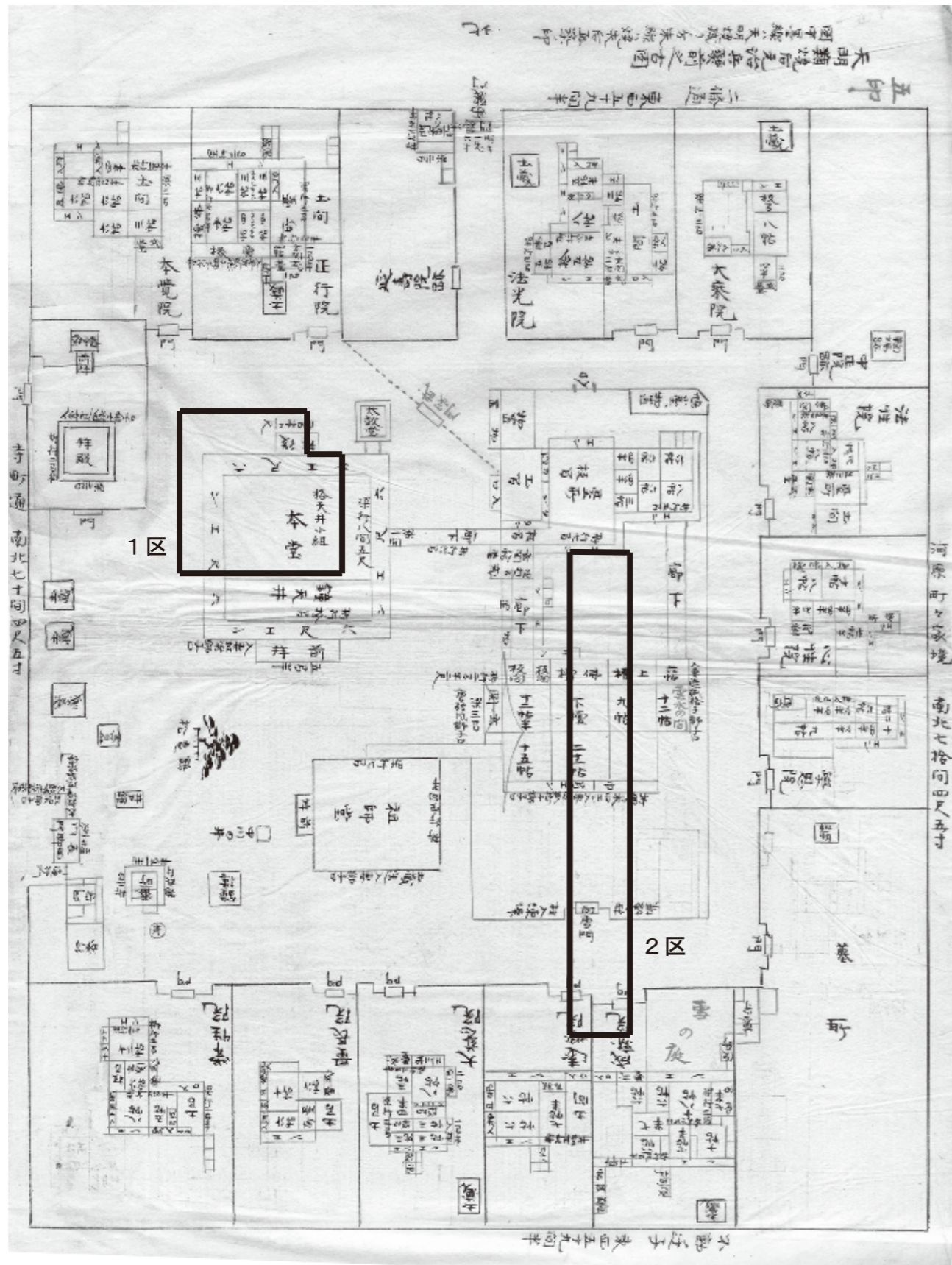
現妙満寺所蔵の『妙満寺志稿』には、江戸時代から明治時代の絵図があります。今回の調査では、本堂の規模や構造が、絵図と遺構でほぼ同じことがわかり、近世から近代へと続く妙満寺の姿を発掘調査からも明らかにすることができました。



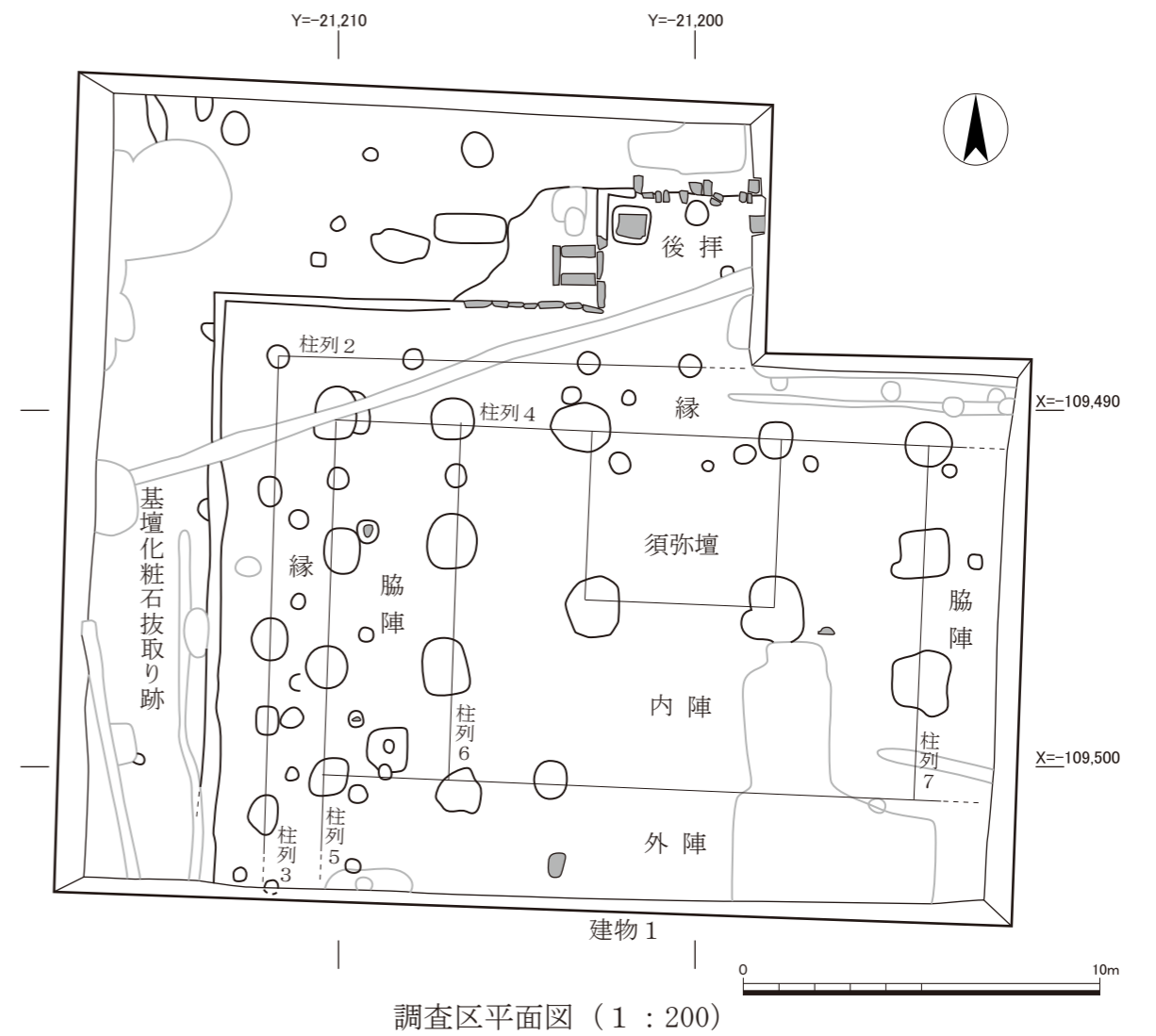
調査地位置図 (1 : 5,000)



寺町内における妙満寺の位置 『洛中絵図』より



「天明類焼后元治兵燹前ノ古図」『妙満寺志稿』より（黒太枠は調査区）



調査区平面図（1：200）



調査区全景（北西から）